甲奴郷土史だより

第22号
2021年7月
甲奴郷土史研究会発行

徳川吉宗から褒美を貰った有田村の名主

鶴本　節子

徳川吉宗と言えば八代将軍で、テレビドラマの『暴れん坊将軍』を連想される人が多いかと思う。また時代劇で有名なだけでなく、インターネットのサイトなどでよく見られる歴史好きの人たちが行う【徳川将軍知名度ランキング】では第五位、【最も優れた徳川将軍は誰か】という問いには、初代・家康に次ぐ堂々の第二位にランクインするという、名君として語られることが多い吉宗である。

では、徳川吉宗がどのような人柄で、どのような政治を行ったのか。まず人物・吉宗に迫ってみたいと思う。

生年貞享元（一六八四）年十月二十一日に、紀伊徳川光貞の四男として生まれた。初めは越前国丹生郡に三万石を領したが、兄が相次いで亡くなったため宝永二（一七〇五）年紀州藩主に迎えられ、さらに正徳六（一七一六）年将軍家継の死後徳川宗家を継ぎ、享保元（一七一六）年八月十三日将軍宣下。吉宗の行った享保の改革は、「諸事権現様（家康）定め通り」と宣言して実行された。

- **文武の奨励**
- **法令の編纂**
- **人材登用**
- **新田開発**
- **貨幣改鋳**
- **目安箱の設置**
- **小石川養生所を設置し、医療改革**

など多方面にわたる実績を残し、幕府中興の英主と仰がれた。

しかし、改革も治世後期には成果が上がらず、家重に家督を譲ってからは大御所と呼ばれた。在職三十年。没年宝暦元（一七五一）年。

徳川吉宗像　●出典：紀伊藩

吉宗は、幼い頃から学問に明るかったことから、勤勉家で切れ者だったとされている。また、武芸や芸事にも優れた、文武両道タイプでもあったそうだ。そして、新しい物好きで好奇心旺盛の理論派の性格だったようだ。海外からの絵画や学問、書籍にも大いに興味を示しており、キリスト教関連以外の洋書の輸入を許可している。新しい物好きの極めつけは、自らベトナムからゾウを輸入してしまうほど。吉宗のもとへ陸路で運ばせていたそうで、長崎から江戸をゾウが闊歩したそうだ。

吉宗には、食べ物に関する話も多く残されている。今も静岡県の名物である安倍川餅が大好物で、毎年地元出身の家臣に作らせていた。また現在も酪農で知られる千葉県に牛を輸入し、繁殖を始めたもの吉宗である。そこで作られた乳製品は「白牛酪」と呼ばれていた。今でいうバターのようなものだったようだ。

（日本大百科全書他より）

吉宗が輸入したゾウ

●出典：関東地方整備局

白牛酪 再現　●出典：Live door

さて、数ある吉宗を主人公とした小説の中で、平成十五（二〇〇三）年に旭日小綬章を受章した津本 陽氏が書いた『大わらんじの男　八代将軍徳川吉宗』がある。

この小説は、徳川吉宗が紀州藩で生まれた場面から始まり、晩年までを描く徳川吉宗の一代記という内容である。題名の『大わらんじの男』とは、人一倍身体の大きかった吉宗が、駕籠から突き出た足に大きな草鞋を履いていた姿から付いたそうだ。吉宗の身長については諸説あり、一八〇cm以上あったという説と、一五五cmくらいしかなかったという説もある。

作者の津本 陽氏は、主に剣豪や戦国大名、幕末英傑を主題にした歴史小説が多い。豊富な資料を背景として小説を書いているが、一方で調べたことをすべて書き出すということも多く、それゆえ剽窃と取り沙汰されることが度々あった。

『大わらんじの男　八代将軍徳川吉宗』の主な参考資料として、

・「徳川実記」（吉川弘文館「国史大系」）
・「南紀徳川史」（全十八巻、清文堂出版）
・大石慎三郎「大岡越前守忠相」（岩波新書、一九七四年）他
・辻達也「徳川吉宗」（吉川弘文館、一九五八年）他

などが末巻に挙げられている。

この小説の中に、

「（前文略）・・・上さまの思し召しはさようにてはなく、悪人を吟味よりは、良き人を吟味されたしとのことにてありし。役方の者どもはいずれも役儀の品は多かれども、向後は郡（こおり）の

国民(くにたみ)どものうち、人柄よき者を随分心がけ聞き出し、恩賞をおこなうようつかまつるべしとのことであった。」（第三巻より　原文ままま）

と勘定方吟味役　萩原源左衛門に伝え、源左衛門が諸役人に問い合わせたところ、

備後代官の飯塚孫四郎から、備後国甲奴(かつぬ)郡、有田村の百姓名主甚三郎について聞き及び、さっそく吉宗に言上した。とある。

この時代、備後国の幕領は六十余カ村あったが、何かあれば代官の非を訴える公事（訴訟）をおこしていた。

享保二（一七一七）年の福山領で惣百姓一揆がおこったのを皮切りにどんどん広がっていき、翌年の享保三（一七一八）年には、本郷村吉兵衛・伊兵衛両人が一揆に関して成敗された。

また吉宗による倹約令に追従するように、広島藩がきびしい倹約令を出し、身分統制をきびしくするなどしたため、不平を持つ者が増えていった。享保十七（一七三二）年には、ウンカによる有名な「享保の飢饉」がおこったため、中津領甲奴・神石郡において、貢租増徴などに反感が高まり百姓一揆がおこった。

そのような中で、年貢についても、いろいろ申し分を立て、払うまいとする他村に有田村の名主 甚三郎は同調しなかった。「代官が悪くとも、民として公儀に対して疎かにすることはない」と言い、有田村では貢納が遅れる農家が一軒もなかった。

また、甚三郎は近頃幕領六十村の名主が申し合わせ、代官所へ訴訟しようとしたとき、同調しなかった。このため訴訟が行えず、他の名主たちが甚三郎の家へ押しかけ、同調するように強請したり、脅したりしたが応じなかった。そのため、その夜に百人近い人が甚三郎の家に押しかけた。「殺してやる」と脅されても、「好きなようにしろ」と腕を組み、沈黙したまま一言も口を開かなかった。人々は甚三郎を蹴倒し、家を粉々に打ち壊したが、さすがに殺すこともできず引き上げていった。

吉宗は甚三郎のおこないを萩原源左衛門から聞くと、感動した。

「人情紙より薄しと申す世に、昔の義士の覚悟にも劣らざることじゃ。不学の民にして、かようの心底あるは、とかく生質(せいしつ)の美と申すものは格別じゃ。早速に褒美をつかわせ」

（第三巻　原文ままま）

甚三郎は、名字帯刀御免の特典をうけ、銀三十枚を賜った。

もう一人、備後代官がその後詮議したところ、有田村に又右衛門という孝子がいた。わずか六、七石ほどの米を作る百姓だったが、継母に朝夕わが手で美膳をそなえ、孝行が近隣に聞こえていたそうだ。

日照りのときも、田作りに精を出す又右衛門は、作柄をおとすことはなかった。彼には銀三十枚が与えられた。

ここまで『大わらんじの男　八代将軍徳川吉宗』に記述のある内容を紹介したが、ここからは登場人物について紹介していく。

まずは、萩原源左衛門について紹介する。

萩原源左衛門は、萩原美雅（よしまさ）が正式名であり、通称が善次郎、三左衛門、源左衛門である。江戸中期の旗本。もと勘定奉行所属の下級御家人であったが、元禄五（一六九二）年勘定方となり、蔵奉行、勘定組頭を経て、六代将軍徳川家宣らによる正徳の治が始まると、改革を実際に差配した新井白石により登用され、復設した勘定吟味役に復職し、二の丸留守居などを歴任し、佐渡・長崎奉行を経て、勘定奉行となった。

貨幣改鋳事業や、正徳元（一七一一）年の朝鮮通信使の江戸来訪の際の東海道から摂津までの道中点検、諸国鉱山の差配など、その活躍は多方面に渡った。

享保七（一七二二）年には、大井川の治水工事にその手腕を発揮し、構築された五百間ほどの堤は、その周辺の人々に「源左衛門様堤」と呼ばれた。

（ウィキペディアより）

■■■

代官は飯塚孫次郎とあり、これも公儀を重んじたことによるものである。
飯塚孫次郎についてはこれ以上の資料はなかった。

そして、【有田村百姓名主 甚三郎】と【有田村百姓 又右衛門】については、甲奴町誌や上川郷土誌、広島県史を調べてみたが、彼らを記述した書物は見つからなかった。

■■■

『祇園池沿革の記録』より

鶴本　節子

世羅町へ向けて甲山甲奴上市線を走っていくと、西教寺を通り過ぎた左手の山と山の間に堤が見えてくる。『祇園池』である。小童にある灌漑施設（溜め池）としては、一番大きく貯水量は三〇、〇〇〇㎥もある。

この『祇園池』を造るために、小童の人たちの熱意と大変な苦労があったことを、小童村誌へ**【『祇園池沿革の記録』より抜粋　原本は祇園池池子総代保管】**と題して、近藤昭夫会長がまとめられている。今回その貴重な原本を保管されている、甲奴郷土史研究会会員の寺田朱美さんからお借りし、原本の写真などと一緒に紹介したいと思う。

『祇園池』を造った大きな理由は、昭和一四（一九三九）年六月から九月にかけて起こった大干ばつによってである。

この年の干ばつは記録的なもので、全国的にも「空梅雨」気味だったが、特に前年昭和一三（一九三八）年の一一月から翌年の九月まで、長期にわたり雨が少なかった。

なかでも六月から九月にかけて、西日本では降水量が非常に少なく、六月下旬になると、太平洋高気圧が張り出して日本上空に長期間居座った。広島県でも七～八月の雨量が四五・六㎜（平年の十四％）だった。未曽有の干ばつの為、田植え見込み面積七万三七二二町に対し、田植え不能地四六二三町、枯死面積三万八九九三町、枯渇面積二〇七二町にも達したそうだ。

小童でも同じく大干ばつで、水不足の中かろうじて田植えは終わったものの、その後一滴の雨もなく日照りが続いたため、苗の新芽も出るとしおれ、下葉は赤変してまもなく枯れてしまうという情景が、田から田へ拡がっていった。

その惨状は、広定村稲田面積の半分以上に達したのである。このような大干ばつは、古老の話によると明治九（一八七六）年のそれに匹敵するものであった。

（これより文中敬称略）

その年七月一八日の広定村議会の帰途にあった土屋卯三郎、上ヶ内兼市、寺田伊九郎の三人は、風越垰に腰を下ろしこの年の大干ばつについて大いに懇談。話は展開して貯水池新設の誓願を立てるに至った。

七月二〇日、村長福原亮三を訪問。貯水池の新設について決意を披歴して協力を仰ぎ大賛成とその確約を得た。その後村長は県庁に対して調査を依頼。**二五日**には、視察のため秋中技師が来村した。干ばつの視察の後、貯水池の候補地として塩貝播磨越、山根中原、塩貝福本奥、頼藤湯舟等を視察。

二八日には村民を招集し、干ばつ対策協議会が開催された。その結果、頼藤より下の

八反田、大井手より河原井手の区域に注ぐ貯水池の新設に対し、大体意見が一致したので請願書を作成し、広定村役場経由で三〇日には県庁へ提出された。

九月二一日、関係者全員で塩貝福本次助宅奥、播磨越等を視察。その後会合を開き、種々協議の結果、塩貝播磨越を新設貯水池の第一候補として選定。同日、貯水池設置委員に住谷為五郎、近藤栄一郎、上ヶ内兼市、土屋卯三郎、寺田伊九郎を選任した。

一〇月二七日、広定村助役池田唯市より寺田伊九郎へ貯水池新設の許可指令があった旨報告、並びに将来に注意すべき点の指示があった。翌二八日塩貝播磨越に集合、種々調査検討の結果同所が第一候補と決定した。塩貝代表近藤慶八に地元への打合せ方依頼する。

明けて昭和一五（一九四〇）年元旦、委員会を開催。その席に砂走三蔵、沖田要蔵、田中六蔵を招き、塩貝に赴いて地主や部落の諒解方懇願、また役場宛て耕地整理組合設置の手続き等、各々分担着手の打合せを決定。

一月一三日、塩貝部落は貯水池の件につき、集合しこれについて協議が始まる。同協議会に、委員会より近藤栄一郎他の参加を求めたが、協議中の事由により待機の旨連絡があり結果を待った。翌日一四日午後に連絡があり地主は了解するも、部落としては何ら一利なしと評議一決し、諸氏の意思に添え難い旨の解答であった。

委員会においては、更に塩貝中堅層と懇願を重ねたが、貯水池の用地一町歩を減反抹消することは死活に関する問題となり、また補償金等の問題もあり播磨越を貯水池にする案は廃止となった。

一五日、協議の結果第二候補地の山根中原を貯水池に決定。関係者に塩貝部落交渉の顛末を報告の上協力方懇請。結果関係者全員の快諾を得た。一六日、西教寺下の福場商店において、地主諸氏と土地問題に関する諸契約を行う。

二五日、池子全員集合して所用土地の交渉結果を報告。同時に各井手の負担率を審議の上次のように決定した。

大井手　一〇〇点、　沖井手　九六点、　八反田井手　八三・三点、
車井手　七〇点、　彦三井手　三〇点、　河原井手　二九点、
洗場井手　二〇点、　寺沖井手　一二点、　池尻　一二点、

また、工事委員に次の各氏を選任した。

立上忠太郎、宮地政助、沖田要蔵、近藤与ェ門、黒木清市、新谷篤朗、田中六蔵、若木伊予太郎、池田薫八、佐藤類三郎、薄田亀一、田村菊以智、藤原与ェ門、砂走三蔵、高杉忠吉、阿実重市、前原君太郎、山本君之。

そして貯水池を祇園池と命名する。

二月二四日、甲山耕地課より久保田業務課長、深串技師が設計のため現地へ出張し、工事委員全員がそれの補助を行った。二五日には工事用の小屋を設置。

三月一日、社司近藤栄一郎により地鎮祭を挙行。翌二日、工事に着手した。

二八日、真堀が完了し耕地課の検査を受ける。続いてはがね土を投入つき固め。以後六月初旬まで工事は続き、農繁期に入ったので工事は一時休止となった。工事の休止まで

の延べ人数は四、〇〇〇人となった。ちなみに夫賃は、男性特種で二円、男性一般で一円八〇銭、女性で一円四〇銭であった。

また、資金調達は近藤栄一郎、砂走三蔵、池田薫八、若木伊予太郎の交互保証による借入を、小童産業組合より行った。東側山林については、藤原群一の仲介により金谷忠之より譲り受けた。

九月一日より工事再開。川通りに床堀、はがね土の搬入つき固め等を行い、春期工事と同高等線まで仕上げ石垣工事の完成を見て秋の農繁期に入った。

一一月二〇日より再開。寺田伊九郎、隠地久吉は、御調郡坂井原の賀上と久井の井上より、トロとレールを借入れ**一二月初旬**に設置完了した。それにより工事の効率が大いに上がった。

また、甲山耕地課職員京光覚郎の斡旋により、在日朝鮮人約一〇人にトロ一杯三〇銭の請負を依頼した。一方、他方にも請負工事を実施して工事の促進を図った。

以上により工事は大きく進渉し、**昭和一六（一九四一）年四月末**には大半の工事は終了した。余水吐けの側壁と竪樋のコンクリート工事が終り、田植えとなった。

九月一日より余水吐けのコンクリート工事を、上田谷忠、川口房市に依頼し月末には終了した。**一一月**より張芝工事等の残りの工事を行う。

一二月二五日、甲山耕地課の完了検査を受ける。これまでの工事費は一八、〇〇〇円、延べ人数は約一〇、〇〇〇人となった。そして工事費の一部に充てるため、池の両側の山林を黒木清市に売却した。

昭和一七（一九四二）年二月に、堤体内側の修理工事の指示があり在日朝鮮人の請負で、はがね土投入つき固めの工事を行い**四月中旬**に完了した。

五月八日、落成式を小童農業会事務所にて挙行。村長代理助役奥迫藤四郎、元村長福原亮三他池子全員が参列した。会計報告、功労者表彰等の後、祇園池管理者に寺田伊九郎、隠地久吉を推挙した。

その後**同年一〇月**より**昭和一八（一九四三）年五月中旬**まで、分水点までの水路工事を行う。この時期、戦時下のため物資は窮乏しセメントの入荷は無かった。**六月**、水不足のため池子全員協議の上、池の水を抜いて配水し田植えを終わった。

昭和二三（一九四八）年二月、直営にて余水吐け修理工事を行う。**昭和二四（一九四九）年四月**に完了。

昭和一四（一九三九）年以来一〇年間に渡った祇園池の工事が全て完成した。

昭和二四（一九四九）年四月に、西教寺本堂において上棟式を挙行する。役場より元谷書記並びに池子全員が参加する。席上、記念碑建立の提案があってこれを了承し、建設委員長に佐藤類三郎を選任する。

昭和二七（一九五二）年四月三日、記念碑が完成し除幕式を行う。

揮毫　佐藤類三郎、　施工　松崎、柿原石工店。
功労者表彰
寺田伊九郎、上ヶ内兼市、土屋卯三郎、近藤栄一郎、住谷為五郎。

一〇年の歳月を経て祇園池は完成を見たが、その間多くの方々の奉仕があった。資金の融通、資材の斡旋等をされた小童産業組合長の近藤慶八、賃金支払いと帳簿の整理等をされた小童産業組合専務理事の小泉糧一、工事の進捗管理、上庁への陳情、請願及び補助金の獲得等をされた村長の福原亮三、土木主任として耕地課との連携、工事の進捗管理等をされた助役の池田唯市、続出する難問題の対処、工事細部への気配り、進捗計画の樹立等をされた長老の佐藤類三郎、住谷為五郎、度々現場を訪れて工事見舞いをされた地主の山岡恒、上ヶ内保市、また青年団、婦人会、学校生徒等々労力、精神両面の援助があった。

【完成時の祇園池の記録】

一、水面積　一町六畝歩（約一〇、〇〇〇㎡）
一、貯水量　六、五〇〇立坪（約三九、〇〇〇㎥）
一、堤体　長さ　三十五間（約　六三ｍ）
天巾　二間四分（約　四ｍ）
底　長さ　二十四間（約　四三ｍ）
巾　二十二間半（約　四〇ｍ）
一、樋　底樋　長さ　二十二間半（約　四〇ｍ）
径　一尺四寸（約　四二㎝）
竪樋　長さ　七間半（約　一三ｍ）
径　八寸（約　二四㎝）
以下略

祇園池の沿革を記録された筆者は、記録の最尾に次のとおり文章を書いて締められている。

『かくて祇園池は、関係者の幸福のみならず広く小童部落民の幸福を見守るであろう。よろしく池子たるものは永久に祇園池の本質を見極めつつ、その使命達成に万遺憾無きを期すべきである。』

《用語の説明》

◉床堀（とこぼり）　構造物の基礎を作るために、地盤を所定の深さまで掘削すること。

記念碑 揮毫 佐藤類三郎

祇園池記録の原本

記念碑横

寺田伊九郎、上ヶ内兼市と彫ってある

現在の祇園池

●はがね土（刃金土・鋼土）　ため池等の堤体盛土として用いる遮水を目的とした土のこと。通常、はがね土は特定の山から採取した天然の土を指す。

床堀　●出典：国土交通省九州地方整備局

はがね土　●出典：香川県

郷土誌「げいびグラフ」から《ああ、懐かしの甲奴・・・》其の四

㈱菁文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料で、掲載させていただく了承を受けた記事をご紹介しています。

今回は祇園池にも関わりのあった、小泉糧一翁頌徳碑をご紹介します。

☝佐藤類三郎氏の頌徳碑

村の長老で、村民からの信頼も厚かった。

第48．49．50代広島県知事大原博夫氏の揮毫による。

【碑銘抄　小泉糧一翁頌徳碑】　小童公民館長　近藤　範二（当時）

平成元（一九八九）年第五三号　㈱菁文社「げいびグラフ」より

碑銘抄　小泉糧一翁頌徳碑

（甲奴郡甲奴町小童）

この石碑は昭和41年の建立で、古い碑ではない。碑文を読んで深く感じることは、この人は社会から求められたことを忠実に受け、自己の能力を惜しみなく発揮された人。簡単なことだが誰でもができないことだ。人から社会から頼まれない、要望されないのに無茶苦茶働きたがる人が多い。これは奉仕ではあるが、社会へ迷惑を掛けることが多い。また、これと反対に相当の能力を持っているのに、社会から、人から頼まれても一向に働かない利己主義者も多い。

小泉翁は、社会から人から頼まれれば、利益にもならない、名誉にもならないことを何でも引き受けて実行する人だった。確かに彼自身、才能も人並み優れて秀才ではあった。村長でも組合長でも適任者であった。そして事務屋でもあった。それだけの才能を持った翁は、決して人と競争までしない、希望者へ譲る精神を持っていた。最悪の役務であった地元農業協同組合の大破綻の時でも敢然と組合長を引き受けて、この更生大事業を完成したのである。

昔の偉人は多いが、現代偉人として近郷稀にみる人柄で、現代人の学ぶべきところの多い人物だと私は思う。

小泉翁が社会のために、その時代に対応して尽くされた功績の一つをここに紹介しておこう。

彼がまだ若い消防団長の頃、火災の恐ろしさを深く感じた。一度火災が発生すると、その当時は道路もなく、消火器は昔の手押しポンプ、何の役にも立たず、あれよあれよというううちに全焼。そして被災者は、火災保険の制度もない時代、何の補償もなく、皆貧困のドン底に落ちたものだった。それでも土蔵のある家は、土蔵だけが焼け残り、僅かでも衣食住を保てることができた。

そこで小泉氏は各戸へ土蔵をつくることを奨め、また、土蔵頼母子をつくって全戸に土蔵を建てさせたのである。また一方、非常用水の確保を考え、ポンプが来るまでの救急措置を発案。翁は消防団長時代、本気で火災から地区民を守ることに尽力したのである。

現在の道路網や消防施設の完備した時代からは考えられないことかもしれないが、今から70年くらい前は、自動車もなく、電話もなく、道路のついていない家へは手押しポンプを担いで行くありさま。一度火災が起きれば消す術は無いに等しい時代だっただけに、土蔵と非常用水を奨励した翁の功績は特筆すべき事柄といえよう。

（小童公民館長　近藤範二）

火事から家財を守るために建てられた土蔵も現代においては無用の長物となりつつある。

甲奴の石造物紀行 ＝梶田・梶田郷＝

二一号では、梶田の戸下にある【牛馬供養塔】をご紹介しましたが、今回は梶田郷から矢迫線を通って福田へ抜ける道沿いにある石造物をご紹介します。

まず矢迫線の上り口には、回国塔（かいこくとう）・奉唱塔（ほうしょうとう）・石灯籠（いしどうろう）・三界万霊塔（さんがいばんれいとう）がきれいに並んでいます。これらは【経典供養塔（きょうてんくようとう）】と呼ばれ、仏教の経典の名称や経文を石に刻んだり、読んだお経の内容を後世に伝えるため、石に記録して信仰心のあらわれとされました。矢迫線の坂道を少し進むと、道路わきの草むらにぽつんと馬頭観音が立っておられます。石には享保七年（一七七二）と彫ってあるので江戸時代のもののようです。

三面八臂（さんめんはっぴ）（三つの顔に八つの腕を持っている）。お顔は憤怒の相。昔は馬の無病息災の守り神として信仰され、町内にはこの１つだけのようです。

左に梶田の風景を見ながらもう少し進むと、道が少し広くなり、【梶田八十八カ所】の一つだった九つのお地蔵様がおられる屋根付きの建物があります。その両脇には、左に【庚申塔】。右には【地神祭】とあります。庚申塔は以前ご紹介しましたが、地神祭は「ジジンサン」と呼ばれ本来農業の神様だそうで、町内には西野とこの一つだけです。斜め左には道標があり、【右うが、左ひち】と文字が見えます。

一ｋｍくらいの距離で、歩いてみると坂道が少ししんどいかなぁと思いますが、歴史に触れながらゆっくり散歩するのもいいものですね。

◆矢迫線入り口の四つの石造物

◆町内で唯一の馬頭観音

【事務局より】

・会員募集中です。ご紹介ください。
・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですので、お聞かせください。
・「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
・古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先　鶴本　節子（カーターセンター）
〇八四七 - 六七 - 三五三五